

山内昌栄先生（ハワイ移民一世）の功績

沖縄県立中部病院 ハワイ大学卒後医学臨床教育事業団
プログラムディレクター

本竹 秀光



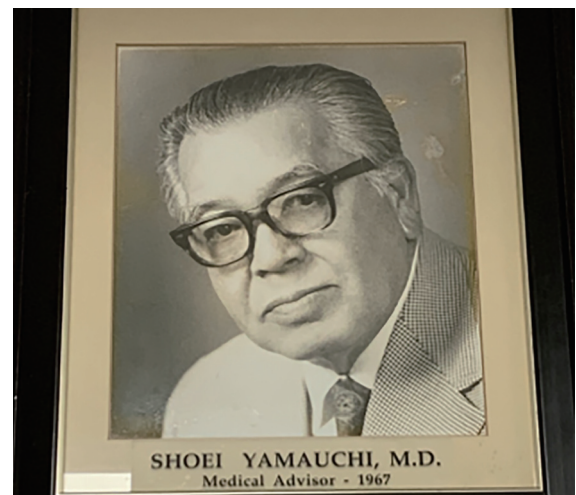
1965年2月1日第28回立法院定例議会で、当時の高等弁務官ワトソン中将が沖縄県における医師卒後臨床研修のための予算を米本国に要求していると発表した。その背景とは。1964年5月、外科医としてハワイで開業されていた山内昌栄先生は米国太平洋陸軍司令部の要請で琉球列島内の医療状況を3週間に及び視察した。その報告書の中で先生は住民に対する米国の施策を痛烈に批判し、医療水準を改善するには、卒後医学研修計画と生涯研修制度、更には医師を養成するための医学部を必要とすること、そのための米国の援助が早急に必要であることを力説された。

山内先生は幼少時に両親とともに移民団として読谷村からハワイに移住され、大変な生活環境の中で勉学に励み1930年代、名門ミシガン大学医学部を卒業され、メリーランド州ボルチモアのサイナイ病院で卒後研修を受け外科専門医としてハワイで開業された経緯の持ち主である。終戦直後沖縄の医療事情は極度の医師不足が大問題であった。

その改善の目的で琉球政府は1949年から契約学生制度を立ち上げ、その後は国費留学生制度に引き継がれ日本本土の医学部に学生を送り出していた。医学生卒後の帰還率は最初の数年は90%台を保っていたが、次第に40%台まで減少した。その最大の理由の一つは琉球には卒後臨床研修施設が無いことであった。そのため公務員医師会、県医師会の有志の方々が、県内における医療施設の整備、医学図書館の必要性、日本本土の医学会への参加、卒後研修と生涯教育の必要性を米国民政府に訴えていた頃である。

山内先生の琉球の医療事情視察報告書、琉球側の訴えが相乗してワトソン中将の米本国への予算要求となったことは想像に難しくなく、医師卒後臨床研修の5か年計画が計上され1966年から開始された。研修病院としては建築中の琉球政府立中部病院をインターン研修病院とすることを日米両政府が同意した。

しかし、実際研修を行うためには県内で指導医を得ることは困難であり米国からの指導医を必要とし、ハワイ大学がこの要請に応じて、1965年6月にハワイ大学と指導医派遣の契約が結ばれた。ハワイ大学との契約による医師派遣は、1966年3月に山内先生がハワイ大学医療顧問団として来島され開始された。中部病院における医師卒後臨床研修制度は1967年に開始され復帰前年の1971年までは米国の指導医の下、1972年本土復帰からは真栄城優夫先生を中心とした沖縄側に引き継がれた。極度の医師不足から始まった沖縄の医療環境は中部病院の臨床研



山内昌栄先生の写真

修の発展や琉球大学の設立も相まって、2008年には医師数は全国平均を上回るまで改善した。

全国に類を見ない島嶼県沖縄の充実した医療はこのような背景のもと支えられてきた。その礎を築いた山内先生の功績は偉大で、我々県民は深く記憶にとどめておく必要がある。戦前、生活苦からハワイに移民した少年が戦後の沖縄県民の命を救ったと言っても過言ではない。復帰50周年の節目の今年、世界のウチナンチュ大会が盛大に開催された。世界に渡ったウチ

ナンチュがそれぞれの地域で活躍されていることは喜ばしい限りである。文化や芸術スポーツのみならず、医療や教育に活躍されている方々も多くおられる中、山内先生の功績は連綿と我々県民の記憶に引き継がれ記憶される必要があると考える。

この文章は真栄城優夫院長退官記念誌「望みあらば道あり」から抜粋要約したものであることを申し添えたい。

